

ゲルハルト・ハウプトマンの短編小説 『踏切番ティール』について

清 水 純 夫

1

ハウプトマンの短編小説『踏切番ティール』は1887年に執筆され、翌年に自然主義文学の雑誌「社会 (Die Gesellschaft)」に掲載された。そのころハウプトマンはベルリン郊外のエルクナーに住んでいた。そして作品内の地名もスプレー川をはじめエルクナー付近の実際の地名であるため、作品の舞台も彼が住んでいた当時のエルクナー付近と推定できる。

このようにこの作品は当時の具体的な状況と深く関わっている。それゆえ当時のドイツの全般的な政治・経済状況と、その中で実際に労働者の置かれた状態や労働者の抱える諸問題を概観しておくことは、作中人物である踏切番ティールの抱えるこの時代共通の一般的問題と彼固有の特殊な問題の分析と理解のために、そしてひいてはティールの全体像の構築のために避けては通れない作業である。その作業からまず開始することにしよう。

当時のドイツは、「80年代からドイツ国内において、あらたな劇的な人口変動が始まっており、海外移住国ドイツというイメージを根底からくつがえしたのである。ドイツ農業はいくどかの好景気の中断や不況から立ち直り、世紀転換期ころにはますます労働力不足 — ことにプロイセンで — にみまわれた。同時にこの時期にドイツは農業優位国から工業優位国へと変貌していた。」⁽¹⁾、「鉄道網の発展や大型船や蒸気船の登場によって、あらゆる地域や海外と安く速く往来できるようになったことがあった。とりわけ鉄道は人びとの生活を変えた。鉄道旅行は日常化し、見知らぬ人びととの接触の機会を拡大した。」⁽²⁾、「1880年代からは電信・電話の急速な実用化がみられ」⁽³⁾た、という状況にあったが、トビアスを轆いた列車には新婚旅行のカップルをはじめ大勢の旅行者が乗っていたことや頻繁に電柱や電信の記述がみられることなどから、作品世界の描写は概ねこれらの状況に対応しているといえよう。

さらに「一八七二・七三年の経済上の繁栄はブルジョア階級を富ましたが、大都市に急速に集中した労働者たちは物価高や住宅難に悩みストライキも頻発した。」⁽⁴⁾、或いは「一八七三年に、泡沫会社氾濫時代につづいて泡沫会社の恐慌と破産がおこった。(中略)。恐慌によって資本の集中と蓄積とは、以前には見られないくらい飛躍的に促進された。」⁽⁵⁾、「八〇年代の末、ドイツの資本主義は今や帝国主義の段階にはいろうとし」⁽⁶⁾ている状況にあった。

即ち、当時、飛躍的に発展したドイツの資本主義はついに帝国主義の段階に達し、海外市場へ

(1)

進出し始めると同時に、国内では資本主義の抱える資本家と労働者の間の矛盾が激化し、それは低賃金での長時間労働や安易な解雇という苛酷な労働条件の下におかれた労働者を団結させ、激しい労働運動を引き起こしていたのである。「相争う社会構造のなかで、労働者は企業家の恣意にも、人生の浮き沈みや病気、失業にも無防備、無権利のままさらされていた。そこで労働者は労働組合の結成や政治的結集によってみずからの絶望的な状況をかえようとした」⁽⁷⁾し、また「一連の社会法規（災害保険にかんする法律、一八八四年、健康保険にかんする法律、一八八九年）は、少なくとも病気で働けないプロレタリアにはいくらかの安心感をもたらした」⁽⁸⁾とあるように、一定の成果も労働者は勝ち取った。仕事上の怪我で2日入院したティールにもこの保険が適用されたと推測できる。

しかし資本主義社会に身を置き、その中で生計を立てている以上、労働者の人間性も資本主義が及ぼす悪しき影響を免れることはできず、労働者の分業と労働疎外によってモラルは低下し、感覚は荒み、野蛮な本性が剥き出しになり、人格は歪んでくる。そして弱肉強食の資本の論理である排他的な競争原理、貨幣万能による人間の能力の貧困化、共同体の崩壊にもなると強まる利己主義などに侵された結果、およそヒューマニズムとは相容れない粗野で貧困な人間性が蔓延してくる。

同時にそれはまた作品解釈にも認めることができる。即ち、この作品は従来、主として次のように解釈されてきた。視覚や聴覚に訴える精緻な自然主義的な描写と、自然主義を越える比喩的・象徴的表現によって厳かで敬虔な自然と、荒々しい魔的な自然の二面性が描かれていて、それがまた先妻ミンナとの精神的な交わりと、現在の妻レーネとの官能的な交わりというティールの内面の分裂にも対応していると。そしてこの分裂は、レーネによるティールのいわば聖地への介入とトビアスの事故死によって自然の中の破壊的な力がティールの中にも沸き起こったかのように、狂気にまで高じ、レーネ殺害を引き起こし、彼を破滅させると。

しかしこの解釈によれば、ティールの破滅は避け難い運命となるため、不可避免的にこの解釈は宿命論に陥らざるをえない。そこに筆者は疑問を感じるのである。そこで、ティールの抱える問題は本当に解決不能なものなのか、或いは実は反対に解決可能なもので作品に解決の糸口が認められるものなのか、の検証をこの小論では試みようと思う。それゆえ、できるだけ作品に即して、筋を辿りながら、ティールの意識の変化の推移における法則性を探りつつ論を展開することとする。

2

もともと敬虔でまじめなティールは独身の時でも日曜日には可能な限り教会に行っていたが、踏切番になって5年たった時、彼は「若い華奢な女性」(37)と結婚し、以後、勤務のない日曜日には必ず2人の姿が教会にみられるようになる。帝国主義の段階に差しかかった資本主義社会

の中で、機械文明の象徴たる機関車に関わる踏切番という仕事に都市近郊の農村部で従事して生計を立てているティールは、中世以来の農村共同体の崩壊と農村の近代化によってもたらされる労働者の孤独、疎外や矛盾を最も強く肌で感じているはずである。もはや中世の親方たちのように名人芸ともいべき仕事を楽しむゆとりはなく、いつでも取り替え可能な歯車の1つとして仕事の中に組み込まれている以上、解雇されないためには彼はひたすら労働に全力投球しなければならない。

もうひとりの踏切番との昼夜交替制でしかも時間厳守という厳しい労働条件下では、激しい温度変化による職業病ともいべき「肺病」(48)に冒されている相棒にみられるように、彼は一歩間違えば重大な事故を引き起こしかねないというストレスと過労から病に倒れる危険に常に晒されているばかりか、皮肉にも踏切番がその安全運行に全力をそそいでいる当のその機関車によって、彼自身が痛めつけられ、大怪我をするという危険も存在する。実際、彼はこれまで機関車のテンダーから落下した石炭の直撃を受けた時と、車内から投げ捨てられたワインのビンが命中した時に入院を余儀なくされたことがあるのである。

その一方で、長期休暇を取って静養し、生活を楽しむことなどは全く考えられない。他の労働者たちと仕事の話をするこも、近所の人々と付き合うこもなく、ひたすら勤務!なのである。労働組合とも無縁な職場でティールは最も無権利な状態に置かれ、いわば時間の正確さと無欠勤という機械のような勤務、時間の奴隷のような勤務が彼には要求される。

しかもティールは機関車が決して好きではない。彼にとって機関車は平和を乱す「怪物 (das Ungetüm)」(50)なのである。だから踏切番という仕事に彼が喜びを感じているとは考えにくい。生計のために、また首にならないために仕方なく一生懸命に奉仕しているにすぎない。19世紀末の資本主義社会における労働者の惨めな状況の1つの典型がティールの場合には認められるのである。

このような労働者は内面的に荒んでくる恐れが多分にある。人間性は歪み、奇形化し、情欲や暴力といった本能的・動物的な面が強まり、理性は沈黙する。精神と官能の亀裂は深まり、人格も調和を失う。しかしティールはそうした傾向に敢然と立ち向かう。彼は日曜日には可能な限り教会へ行く。彼は宗教的な敬虔さを通じて自分の人間性を守ろうとするのである。彼のこの意志は先妻ミンナと結婚したことでますます確固としたものとなる。

ミンナは病弱で優しい女性であり、ティールと深い愛情によって結ばれている。両者とも敬虔で、精神を重んじる人柄であり、家庭では調和した生活が営まれている。職場と仕事が人間性を虐げるものであるだけに家庭はその傷を癒すいわば避難所となっている。家庭が避難所でありうる限り、彼の内面はバランスを保つことができ、狂気は発現しない。しかし2年後にミンナは一息子トビーアスを残して死んでしまう。そして1年足らずでティールはレーネと再婚する。

レーネはミンナとは全く対照的にいかにも労働者らしく遅しい、しかも豊富な肉体をもった女性で、性格もモラルの低下をそのまま地で行くような荒んだ、そして「粗野で横柄な気性、喧嘩

好き、残忍な激情」(38)の点で際立った女性である。この女性の性格が精神を重視するティールの生き方に適うわけではなく、彼はそれに反発するが、同時にレーネの豊満な肉体の放つ強烈な性的魅力に引き付けられ、情欲の虜になり、彼女によってすっかり骨抜きにされてしまう。ティールの意志では全く制御しえない圧倒的な生のエネルギーをもったレーネに彼が愛もないのに縛り付けられることは、彼が機関車を決して好いてはいないのに仕事でやむなくそれに縛り付けられていることに完全に符合する。こうしてティールもレーネを通してすっかり資本主義のもつ非人間性に毒される。そのことを彼もはっきり認識している。

避難所であった家庭の中にも資本主義社会の非人間性が侵入してきた以上、ティールは自分の人間性を守るために今や人里離れた寂しいところにある職場に新たな避難所を求めざるをえない。かくして職場の小屋が彼にとって先妻との精神的交わり、精神的な愛の「聖地 (geheiligt Land)」(40)となる。ここで彼は先妻の写真を机の上に置き、賛美歌の本や聖書を開いて、彼女を偲びながら瞑想にふける。小屋は彼が死者をまざまざと思い浮かべて「エクスタシー」(40)に浸る「礼拝堂」(40)となる。このようにティールはレーネへの情欲に捕らわれる一方で、聖なるものへの憧れを通して敬虔な精神の領域を守ろうとする。

かくしてティールの内面は精神と欲望とははっきり分裂する。しかし分裂したとはいえ、さらにはまたこの「聖地」は機関車=怪物によって常に脅かされ、決して安泰なものではないとはいえ、この「聖地」がレーネによって踏み躪られない限り、彼の中では分裂した精神と欲望の棲み分けは可能で、この状態に彼がいくら「嫌悪」(40)を感じようとも、それが狂気にまで高じることはない。吹雪の荒れ狂う真夜中も踏切番小屋の中は安らぎの別世界であり、「礼拝堂」であり、荒々しい外界からは完全に遮断されている。同様にティールの内面もレーネとの激しい情欲に捕らわれた時とは違い、ここでは精神的な、敬虔な気持ちに満たされている。

しかしこのコントラストは極限にまで強調され、緊張を孕んだものとなっているので、何かの弾みで衝撃を加えられれば一気にバランスが崩れる危険を抱えている。そしてついに、このバランスを崩し、精神と欲望の棲み分けを不可能にする事件が立て続けに起きる。1つはレーネによるトビアス虐待の目撃であり、もう1つは職場付近の畑へレーネが来たことと、それに続くトビアスの事故死である。まず前者からみていこう。

3

ある日、忘れ物をしたことに気が付いたティールはそれを取りに家に戻ったところ、レーネによるトビアス虐待を目の当たりにする。ティールとの間に赤ん坊が生まれた後、継子トビアスに対するレーネの虐待は激しさを増した。しかもトビアスは「頭は異常に大きい」(41)、「顔色はチョークのように真っ白」(41)な知的障害児である。彼は資本主義社会の要求する非人間的で苛酷な労働に耐えうる有用な労働力とはなりえない存在であるばかりか、家庭においても

弟の子守すらまともにはできない役立たずの無能な児として、レーネの怒りの対象となる。弱者に冷たい、ヒューマニズムの欠如した資本主義社会の論理がレーネを通してトビアースに襲いかかるのである。虐待を目にしたティールはいったんは激しい怒りを覚えるが、しかし彼女の「豊かな半ば露な乳房」(47)、「まくれあがったスカートが大きなお尻をさらに大きくみせている」(47) 光景を目にしたとたん、彼は「鉄の網のように丈夫な」(47)「細かいクモの巣」(47)に巻き付かれたかのように骨抜きにされ、抗議することすらなく、トビアースを見捨てて逃れるように家をあとにする。

ティールの頭の中では資本主義社会に虐げられている自分と、資本主義の非人間性を体現しているようなレーネによって虐げられる自分の分身ともいうべきトビアースが重なったのであろう。そして資本主義社会の矛盾がレーネを介してティールばかりかトビアースをも直撃しているという印象を彼は抱いたことであろう。だがティールはレーネに抗議しない。生計で依存しているからには社会に反抗できないように、レーネには欲情で依存しているからやはり彼は抗議も反抗もできないのである。従ってティールはトビアース虐待を黙認せざるをえない。こうして内面的分裂というティールの抱えていた矛盾の急速な悪化が避けられなくなる。そのことは彼の目に映る異様な自然の姿を通して認めることができる。

電線は「大蜘蛛の巣のように電柱から電柱へと絡み付いて伸びている」(49)し、線路は「とつもなく大きな鉄の網目」(49)のようだし、日没の時にはそれは「真っ赤に燃える蛇」(49)のようになる。また列車は「真っ黒な喘ぐ怪物」(50)であり、激しく雨の降る嵐の夜にはライトを照らして接近してくる列車の姿はさらに異様さを増す。「2つの赤い丸い光が巨大な怪物のぎよる目のように闇を貫いた。血の色をした輝きが前を照らし、その中の雨の滴を血の滴に変えた。空から血の雨が降っているかのようにだった」(53)。狂気と血腥い殺戮の前兆をそこに感じ取ることができよう。

しかもこうした自然は客観的な自然の姿というよりはティールの目に映った自然、即ち語り手が、内面的分裂、緊張の異常な高まりと追い詰められた強迫観念によって歪められたティールの視点に限りなく接近して描写した自然であり、それゆえティールの心象風景なのである。その風景がグロテスクで異様なものであるのは彼の内面に狂気が忍び込んでいることを物語っている。

さらに、ティールは上司から譲ってもらった職場付近の畑を耕している時、突然、もしレーネがこの畑にジャガイモを植えに来れば、彼の「最も聖なるもの」(51)が汚されるという思いに捕らわれる。その時、彼は「2年間の死んだような眠り」(51)から覚めたような気がし、同時にトビアース虐待を黙認したことに対し「同情、後悔、そして深い恥じ」(51)を感じ、それは「屈辱に満ちた忍耐」(51)であり、「怠慢の罪」(51)だとして自分を責める。

彼は小屋に戻ってうたた寝をするが、目が覚めると外は激しい雷雨となっている。寝過ごしたため彼は急いで踏切にでかけて行く。雨の中、帽子もかぶらず、列車が来るまでの間、彼はうたた寝の時にみた夢を思い出す。それはトビアース虐待の夢だった。虐待を黙認した負い目が夢の

中では先妻ミンナの姿となって彼を苦しめる。ぼろ衣を身に纏ったミンナは病氣らしく、足取りもおぼつかなく、何度も転びながらも逃れるように先へ先へと進んで行く。彼女はティールの小屋を振り向きもせず、彼を全く無視し、彼との関係を断ち、不安そうに布袋を重たげに抱えて、嵐の暗闇の中を足を引きずって行く。これが夢の内容である。この夢はティールにとって如何なる意味をもつのか。

トビアス虐待を黙認したことが先妻への負い目となり、それは夢の中で先妻がティールを拒否し、彼のもとから逃げて行く映像として知覚される。このことはもはやミンナとのこれまでの精神的な交流が今後は不可能になったことを示している。それはとりもなおさずティールが「最も聖なるもの」に対して憧れを抱くことも、それにより人間性を守ることももはやできなくなることを意味する。嫌悪するレーネのような精神的墮落が彼にも避けられなくなる。先妻との精神的な交わりの場である小屋の中での静かで敬虔な「礼拝堂」と、外の激しい自然、というこれまでの両者の棲み分けによるティールの内的調和は今や完全に崩壊したのである。これがティールにとって夢のもつ重い意味なのである。

しかも翌日はレーネがジャガイモ畑に来ることによって「聖地」も汚されることになっている。彼の内面はレーネに対する嫌悪一色に染まる。しかし欲情においては彼女と同じレベルに、そして引き返すことが二度と不可能なほどティールはまさに墮落せんとしている。その晩の彼のいつもとは違う欲情に駆られた異様な目つきや、寝所での夢遊病的な状態がそのことを裏付ける。そしてもう1つの事件が起きる。

4

ついに翌日、レーネは2人の子供を連れてジャガイモ畑へやってきて、「機械のような速さと忍耐」(56)で畑を耕し始める。「聖地」は汚され、踏み躪られたのである。しかしティールにはこの介入に対して抵抗する気力は無く、彼は「避け難いことに礼儀正しく従おうとする」(57)かのように介入を甘受する。所詮、資本主義的原理の介入に対して彼は無力であり、敗北主義に捕らわれている。それが何気無い彼の挙動にも滲み出て来るのである。

その時、トビアスが列車に轢かれるという事故が起きる。ティールの注意にもかかわらずレーネがちょっと目を離したすきにトビアスが線路に入ったために起きた事故である。ティールは事故を全面的にレーネのせいだとする。注意義務を怠っただけに止まらず、そもそも機関車＝レーネという先に示した図式からレーネが加害者であって、トビアスはまさに彼女によって殺されたとしてティールはみている⁽⁹⁾。トビアスは資本主義に代表される機械文明の犠牲になったにもかかわらずティールの目には機関車＝レーネだけが悪の張本人と映るのである。

同時にまたティールは、トビアスの死は虐待を黙認した自分に対してミンナが下した罰でもあると思う。罰として彼女が自分からトビアスを奪ったと考える。だからティールはミンナに、

「ミンナ、聞いているか？ — トビースを返してくれ — 俺は……その時には俺はあの女を……あの女をぶちのめしてやる — 散々に — ぶちのめしてやる — 斧でだ — わかるか — 台所の斧だ — 台所の斧であの女をぶちのめしてやる。そうすればくたばるだろう。斧でだ — 台所の斧でだ — どす黒い血が！」(62) と、口から泡を吹きながら叫ぶのである。こうしてレーネ殺害をティールはミンナに誓う。

レーネがトビースを乗せた担架に付き添って現場を離れている間、安心してあてもなくさまよい歩いていたティールは線路を横切る栗鼠をみて我知らず「神様が道を飛び越えて行く」(63) と呟くが、同時にすぐに「ばかばかしい (Wahnsinn)」(63) と否定する。その時ティールは乳母車の中に置き去りにされた赤ん坊に気付く。その赤ん坊をみているうちに突然彼は、以前、トビースが木に登る栗鼠をさして「神様」(57) と言った意味を理解し、「レーネがお前を殺した」(63)、「薄情な継母め！」(63)、「あいつの餓鬼は生きている」(63) と叫び、赤ん坊を絞め殺そうとする。このことはどう解釈したらよいだろうか。とくにトビースの神についてはほとんど論じられてはいないように思われる。赤ん坊もレーネの分身で、あらゆる点でティールの敵であるばかりか、トビース虐待の原因を作った存在であるからにはトビースの敵でもあるので、トビースの仇討ちにもなる赤ん坊殺害にティールはさほど抵抗は無いようにみえる。しかも赤ん坊が死ねば彼と同じ苦しみをレーネも味わうことになり、レーネに対する復讐にもなるから、なおさら抵抗は無いと思われる。唯一、ティールを躊躇させるものがあるとなればそれは教会へ通う彼の敬虔さであろう。なるほどキリスト教の教義は殺人を厳しく戒めているので、もしティールが敬虔なキリスト教徒であるならば、殺害はむずかしいと思われる。しかし、すでに述べたように、ティールの宗教的敬虔さは私的な「礼拝堂」で死者との交歓の中で「エクスタシー」に浸るという極めて特異なものであった。これが真にキリスト教の教えに適ったものであるかは疑問の余地がある⁽⁶⁾。

さらにティールは「今、彼にはその意味するところがわかった」(63) とあるように、トビースの神＝栗鼠、の意味がわかったとされる。栗鼠を神とみるのは、動物崇拜のフェティシズム(物神崇拜、呪物崇拜)とみることができよう。知的障害のあるトビースはキリスト教のレベルではなく、文明の未発達な未開人にみられるフェティシズムのレベルで神に目覚めたと考えられる。そしてそれを今やとティールは悟ったのである。この地の教会はトビース虐待をしているレーネでさえも後ろめたさを感じることなく通えるような教会であるし、ティールの「聖地」もトビースの命も教会の神は守ってはくれなかったことで、ティールが教会の説く神に疑問を抱いたことは想像するに難くない。だから、汝殺すなかれ、という聖書の教えもティールにはもはや説得力をもたない。彼は今やトビースの素朴なフェティシズムの方に共感し、殺害に及ぼうとするのである。このように、狂ったからこそティールははじめてトビースの神がわかった、というものではないのである。狂っていようと狂ってまいと、この時点でティールはトビースの神を理解したはずである。彼の思考には筋が通っているのである。

一度は赤ん坊殺害を思い止まったティールではあるが、トビアスの死が確認されたため気を失い、自分の家に運ばれてレーネと赤ん坊だけになった時、彼は2人を殺害する。そして完全な狂気に捕らわれた彼は、翌朝、事故現場でトビアスの毛糸の帽子をさすって座っているところを発見され、憲兵によって施療院に収容される。トビアスの帽子をさする彼はトビアスと一緒にいる幻覚をみているのであろうか。恐らくはまたミンナとも和解したのであろう。このように狂気に逃避する彼の姿を通して、夢が現実となるこの狂気の中にのみ彼の救いのあることが暗示される。しかし、そうだとすればその考え方はまさに敗北主義ではないのか。

また、見落としてならないことは、作品の結末でレーネがトビアスの死に強い衝撃を受けて反省し、まるで人が変わったように神妙になっていることである。この点について従来の説では指摘はなされてもあまり重要視されず、そのため十分掘り下げて論じられることもなかったが、筆者には彼女のこの変化は極めて重要な意味をもつように思われる⁽¹⁾。だがティールは彼女のこの変化を目にしても無視し、信じてもないようである。しかし作品の中でこれまで語り手はティールの視点か語り手の視点かの区別がつかないような描写を至るところで行ってきたため、ティールが狂気に捕らわれると現実なのか幻覚なのか読者は判別に苦しむことが多かったが、レーネの改心についてはティールが気絶している時になされているので、語り手が直接読者に伝える事実であると断言できる。その内容は次のようである。

「彼女は全く別人になっていた。以前の反抗の痕跡はどこにもなかった」(66)。その他にもティールがまだ気絶する前の「レーネはいつまでも泣いていた。彼女のかつての反抗のどんな痕跡も彼女の姿からは消えていた。」(60)、「レーネはトビアスについていった。彼女の顔は青白く、目の回りには褐色の隈ができていた。」(64)、「レーネは絶えずしゃくりあげ、とめどなく流れる涙で顔を濡らしながら、砂の中を赤ん坊の乗った乳母車を押して行った。」(65)などの描写も併せて考えると、レーネはやはり事故後、改心したと判断して間違いなさそうである。そうだとするとティールはレーネを殺すべきではなかったということになる。何故ティールはレーネの変化がわからなかったのか。或いはもしわかっていたとしたら何故彼女の改心は無視したのか。ここに問題の核心があるように思われる。さらに踏み込んで考察してみよう。

5

レーネの背後に見え隠れする資本主義が彼女を操っている悪の根源であるという認識がティールには欠如しているがゆえに、彼は機関車＝レーネという資本主義の現象にすぎないものをその本質だと見誤り、真の敵を見間違えた結果、ラダイト運動の労働者のごとく機関車＝レーネに襲いかかるのである。労働者の自己変革、労働者の連帯、資本主義との階級闘争などの視点を欠いたティールは資本主義社会の矛盾に連帯して立ち向かうのではなく、短絡的にレーネという1人の労働者に罪の全てがあると考えるため、矛盾の解決はその除去・抹殺しかないとして必然的に

テロリズムに走ることになる。

このようにティールの抱える問題は彼個人ではもはや解決しえないものとなっているし、真の解決は目的意識的な集団の行動の中でのみ可能であるにもかかわらず、彼のように個人だけで解決しようとするとは非合法的テロリズムに行き着かざるをえない。個人のレベルでの解決しかみえていないティールはまさにその典型である。だからレーネの変化に彼は気が付かないか、もしくは気が付いても意識的にそれを無視し、認めまいとする。

トビアス虐待というレーネの罪は大きなものであっても、語り手の言うように彼女の改心が本物なら、彼女には罪の償いとして懺悔を通して横柄さ、我欲、欲情など非人間的な本性の克服の努力と、ヒューマニズムを身につけることが求められよう。さらにティールともども労働者と連帯し、真の敵たる資本主義に立ち向かうことが求められる。それはまた欲情でどす黒く汚れたレーネの感性を磨き、彼女の内面を人間らしいものに変える保証となるはずである。そういう可能性をレーネの改心は秘めている。しかしその実行の道はティールによって閉ざされる。罪の償いと自己変革が彼女には許されない。その意味ではレーネもまた被害者なのである。

6

資本主義的非人間化の嵐に日々揉まれる敬虔で真面目な労働者は、労働者相互の信頼により一致団結して資本主義の悪に立ち向かう立場に立たない限り、内面的に崩壊し、狂気に捕らわれ、自分をも他人をも破壊するテロリズムに行き着く、ということをティールの事件は物語っている。それは裏返せば、トビアス、レーネ、さらにはティールの運命も決して不可避な宿命などではなく、ティールとレーネの労働者としての自己変革如何では克服可能なものだけということである。そのことが、一見、出口なしの悲劇を描いたようにみえるこの作品から読み取れるのである。

ティールの視点に自分の視点を重ね合わせて彼の内面をなぞってきた語り手は、結末でのレーネの描写から、実はティールの視点を越える広い視野をもってこの事件を物語っていたことがわかる。彼はティールに同情し共感するいわばティールの分身のような印象を読者に与えながら、実際にはティールとは明確に一線を画していたばかりか批判的でもあったのである。

作家ハウプトマンもこの作品創作を通して語り手のこの認識に到達したからこそ、この後、労働者の側の個人と集団の問題や、労働者と資本家との間の労働争議など労働運動をさらに突っ込んで扱った戯曲に取り組んだのではないだろうか。いずれにしても、労働者は個人では無力で、内面的にも外面的にも破壊は避けられない、だから団結が不可欠である、ということを一個人の悲劇を通して極めて説得力をもって描いたこの作品は、労働運動の点でも作家ハウプトマンの創作の点でもその原点に位置する傑作といえよう。

注

テキストは Gerhart Hauptmann. Sämtliche Werke. Centenarerausgabe Bd.6, hrsg. von Hans-
Egon Hass. Frankfurt a.M./Berlin (Propyläen) 1963 を使用。引用の後の () 内のローマ数字は頁数
を示す。

- (1) 望田幸男著、成瀬 治他編『世界歴史体系。ドイツ史 2 — 1648年～1890年 —』(山川出版)、1996年、425頁参照。
- (2) 同上
- (3) 同上
- (4) 木谷 勤著、林 健太郎編『世界万国史 3。ドイツ史』(山川出版)、昭和49年、第10版、214頁参照。
- (5) J. シュトライザント著、小森 潔他訳『ドイツ人民の歴史』(未来社)、1983年、137頁参照。
- (6) 木谷 勤著、前掲書、223頁参照。
- (7) ディーター・ラフ著、松本 彰他訳『ドイツ近現代史』(シュプリングー・フェアラー東京)、1990年、158頁参照。
- (8) 小森 潔他訳、前掲書、144頁参照。
- (9) H. Scheuer は「聾音をたてて突進して来る機関車にダイナミックな性的な力が付与される」と述べて、「死者ミンナとの神秘的な性的合一」を機関車と関連づけて論じているが、機関車を性的な力の象徴とみることに筆者も全く賛成であるとはいえ、それをミンナと結び付けているのは頂けない。性的であればこそ機関車をレーネと結び付けて考えるべきだというのが筆者の見解である。
Scheuer, Helmut: *Bahnwärter Thiel*. In: *Erzählungen und Novellen des 19. Jahrhunderts*. Bd.2, Erweiterte Ausgabe. Stuttgart (Reclam) 1997, S.399f.
- (10) I. Heerdegen も「ティールは決して正統派の意味で信心深い (religiös) のではない」と述べている。
Heerdegen, Irene: Gerhart Hauptmanns Novelle > *Bahnwärter Thiel* < . 1958. In: *WdF* 207, Darmstadt 1976, S.268.
- (11) たとえば B. v. Wiese は「作家はうろたえて途方に暮れた彼女をほとんど憐れむべき存在と描いている」と述べ、また G. Mahal も「詳述されてはいず、単にスケッチ風に仄めかされているだけだが、トビアスの死後、彼女には驚くべき変化が起こる。(中略) 流血の転回点はレーネにこれまでの横柄な態度をやめさせる。(中略) 肉体的には全く異なるにもかかわらずレーネはミンナに近づいて、愛情の新たな形によって長男の死の埋め合わせをしようとするし、するだろう。」と述べて、いずれもレーネの変化を指摘しているし、H. Scheuer は「男の空想から生まれた多くの女性像と同様にハウプトマンのレーネも決して自分の性欲を自分で決められる主体としてではなく、男の欲望の対象として描かれている。」と述べてレーネに理解を示しているが、残念ながら3人ともレーネの変化した様子の単なる指摘に止まり、変化のもつ意味を掘り下げて論じるには至っていない。
Wiese, Benno von: *Bahnwärter Thiel*. In: *Die deutsche Novelle von Goethe bis Kafka*. Düsseldorf 1957, S.270.
Mahal, Günther: *Experiment zwischen Gleisen*. Gerhart Hauptmann: „*Bahnwärter, Thiel*“. In: *Deutsche Novellen von Klassik bis zur Gegenwart*. Hrsg. von Winfried Freund. 2.Aufl. München (Fink) 1998, S.216f.
Scheuer, Helmut: a.a.O., S.405.